

## シリーズ

### 「グループで聖書を読む」ということ！

聖書を読む会の手引は、人々が集って聖書を読むために用いられてきました。集う方々の地域も、教えられたみことばを实践する状況も異なります。各地のユニークな学び合いをご紹介します、シリーズでその声に耳を傾けて行きたいと思います。

今回は、震災の前から手引を使って聖書の学びを続けておられる、岩手県の水沢聖書バプテスト教会の若井和生先生に伺いました。

若井先生は、東日本大震災後、地域の復興に関わっておられます。自らも放射能被害を受け、牧師としてまた小さなお子さんを持つ親としての葛藤と体験から、「目に見えない放射能と向き合って」(いのちのことば社)という著書を出版されました。

### 3.11 以後の時代に、 真実な聖書の学び会を！

水沢聖書バプテスト教会  
牧師 若井和生

東日本大震災後、放射能の問題と向き合ってきました。福島原発から放出された大量の放射性物質によって各地が汚染され、多くの子どもたちのいのちが危険に晒(さら)されています。さらに悲しいのはこの問題ゆえに各地に分裂や分断が引き起こされていることです。

子どものいのちを守るために必死な思いで避難した方々と、避難しなかった方々、避難できなかった方々の間に、分裂や対立の気分が引き起こされています。放射線の危険を訴えれば訴えるほど混乱が広がり、対立が煽(あお)られてしまう現状のようです。

私が怒りを覚えるのは、それまで年間1ミリシーベルトだった暫定被曝基準値が、福島では震災後に20ミリシーベルトにまで引き

上げられたことです。つまり、それまで「危険」とされていた場所が、突然「安全」とされてしまいました。状況の変化によって安全の基準が勝手に変えられてしまっているのでしょうか。この問題に対する国の対応のいい加減さが、方々に対立を引き起こしているというのが現状だと思います。

放射能の食品汚染についても同じことが言えるでしょう。多くの食品の放射能暫定基準値は現在、100ベクレルとされています。つまり100ベクレル以下であれば「安全」とされ出荷されていくということです。しかし原発事故前は、1キロ当たり100ベクレルを超えるものは、ドラム缶に詰めて原発の敷地内で管理することが求められていました。基準の操作がここでも見られます。その結果、方々で分裂と分断が引き起こされるのです。

対立を意図的に生み出し、状況を混乱させるという手は、実は権力者が昔から用いてきた古典的な常套手段です。対立すれば状況は混乱し、この問題はタブー視され、その結果、権力者は自らの政策を推進しやすくなります。原発推進派も脱原発派も互いの主張は異なりますが、同じ構造の中に組み込まれてしまっていることを、もっと冷静に判断する必要があります。

3.11以後、私たちキリスト者はこの地上での課題をもちや無視できなくなったと私は感じます。原発事故によってもたらされた放射能汚染によって多くの人が苦しみ、被造物全体がうめき声を上げているというのに、真剣に責任を取ろうとする人が誰一人起こされません。

事故を起こした責任者が罰せられることはなく、被害者に対する十分な補償もなされません。国は人命よりも電力会社の利益の方が優先で、事故の原因追求もなされないままに原発を再稼働させてしまいました。原発と放射能の危険を訴える人々は排除され、自由にものを言えない社会が形成されつつあります。

そして憲法改悪の動きの加速化。状況によって福島で安全の基準を変えてしまったこの国は、やはり状況によってこの国の憲法をも変えてしまうことでしょう。

このような現実の中で私たちはこれからどう生きていったらよいのでしょうか。このような状況にどうすれば風穴を開けることができるのでしょうか。どこに私たちは希望を見出していったらよいのでしょうか。

遺伝子を傷つけ、子どもたちから未来を奪い、方々に分断や分裂を引き起こす放射能は確かに罪深い存在です。しかし、この状況を引き起こした元凶は私たちの内側にある欲望やむさぼりです。自然を破壊してまでも豊かさを追求してきた私たちの自分勝手な生き方が今問われているのです。私たちの内面がまず、みことばによって照らし出される必要があるのではないのでしょうか。

この曲がった時代の中にあって真実にみことばを学び合う交わりが、各地で起こされる必要があります。現実から逃避するためではなく、精神論で満足するためでもなく、現実に向き合い、希望をもってこの世界と共に関わっていくための「聖書を読む会」が、各地で起こされますように。

